

東京大学大学院  
情報学環 教育部  
ガイドブック 2022

Undergraduate research student program

# Contents ▶

情報・メディア・コミュニケーション・ジャーナリズムについて多様なメンバーで夜間に学ぶ、知る人ぞ知る東大のコース……  
そんな「情報学環教育部」についてもっと広く知ってもらおうと、教育部生有志によって作られたのがこのパンフレットです。  
ぜひ中身を覗いてみてください。そして、「これは自分のためのコースだ！」と思ったあなたのチャレンジをお待ちしています。

03

挨拶

05

教育部の歴史

07

授業紹介

13

研究生紹介

19

教育部の行事  
自主ゼミ

27

座談会

35

アンケート

39

施設・情報

## 自治会長挨拶

東 京大学大学院情報学環教育部に興味を持っていただき、ありがとうございます。各界で活躍される先生方のサポートの下、面白い人たちが集まり、ワクワクする学びのコラボレーションが起こる教育部の一員に、ぜひ読者の皆様も加わっていただけたら幸いです。

私は教育部2年目で、自治会長を務めている森下瑠里花と申します。本所属はお茶の水女子大学の4年生で、社会学を学んでいます。

新型コロナウイルス感染症流行下の2020年、2021年を教育部で過ごした日々は、授業の多くがオンライン化されて対面の協働機会が奪われたものの、移動の制約が無いメリットを感じながら、時事的な社会問題にも絡んだ非常に濃い学びがありました。たとえば、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議とメディア報道の問題点を学ぶ講義や東日本大震災から10年のタイミングでの福島の原子力災害に関する演習、リモート作業でのドキュメンタリーやVR空間の制作などを行いました。教育部生同士の議論では、本所属での学びとの相乗効果も実感しました。

教育部では、自分が学びたいことがあれば、それを応援してくれる仲間と必ず出会えます。大学の専攻や勤務先を問わず、老若男女が肩を並べて一緒に学び合う場所です。代々慣習として受け継がれている自主ゼミや制作展もあり、講義を受けたり、仲間と議論した



りするだけでなく、発表や表現をする機会にも恵まれています。また、メディア業界を中心に活躍される同窓生の皆様のサポートも非常に心強いです。

教育部研究生として学ぶこと…それは私の人生のターニングポイントになりました。教育部での経験を糧に、より良い社会を作る担い手になりたいと思っています。

私が教育部に来たのは、交換留学先の指導教員の「自分の可能性を広げるためにあらゆる選択肢を検討してみたら」という一言がきっかけでした。インターネットで検索をして、たまたま教育部を知りました。その時、学務窓口で受け取った自治会制作のパンフレットが、出願に向けて私の背中を押してくれました。

何かをきっかけに教育部に関心を持ってくださった皆様が、実際に教育部で学び、自分の人生を切り開かれることを願っています。

2021年度教育部自治会長

森下 瑠里花



## 教員代表挨拶

**情**報学環教育部は、メディアやジャーナリズム、情報やコミュニケーションについて専門的に学ぶことができる2年間の教育プログラムです。大学2年生以上であれば誰でも（ただし大学院生はのぞく）、この教育部の「研究生」になって学ぶことができます。しかもその門戸は、東京大学の学生はもとより、他大学の学生、社会人などにも広く開かれています。様々な異なる背景を持った人たちが集まる、とてもユニークな学びの場です。

教育部の歴史は古く、その起源は、1949（昭和24）年の東京大学新聞研究所の設立にまでさかのぼります。それ以来70年以上にわたって、多くの優れた人材をジャーナリズム、マスメディア、ICT業界などに輩出してきました。メディアやジャーナリズムについて専門的

に学べる学部を持たなかった東京大学において、教育部はジャーナリストやメディア実務家の養成機関としての役割も果たしてきました。

教育部には、実務と学問双方の世界において第一線で活躍する講師陣が揃っています。現役の新聞記者やテレビ制作者、広告クリエイターらが、多彩な授業を開講しています。また講義や座学だけでなく、手足や身体を動かしながら学ぶ実習やワークショップなど、実践的な授業が数多く開講されるのも大きな特色のひとつです。また、学際情報学府の大学院生が主体となって運営する東京大学制作展に参加する授業や大学院の教員によるオムニバス講義など、大学院とのコラボレーションも行われています。近年は、IoT、AIといった最先端技術が生活に浸透し、COVID-19による脅威が長期化するなど、科学技術リテラシーの重要性が高まっています。教育部は、文系理系の広い分野から参加する研究生と講師陣のもと、新しいメディアの在り方を学ぶ最適の場所です。

情報学環教育部は、このようにユニークで充実した教育プログラムです。私たちは知的好奇心に溢れ、意欲に満ちたみなさんのチャレンジをお待ちしています。

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 准教授 / 教育部委員長

上條 俊介

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の  
自主ゼミ  
行事

座談会

アンケート

施設・情報

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報



## 教育部の歴史

戦前の新聞研究室に端を発し、日本のメディア環境の移り変わりとともに変化してきた情報学環教育部。その歴史を知れば、さらに教育部で学びたくなるかも？

### 【戦前】

教育部の前史は、新聞記者をしていた小野秀雄（明治43年東京帝大独文卒）が、大正8年（1919）に岩崎家の奨学金を得て東大大学院に入学し、古今東西の資料を集めながら、新聞理論や広告の研究を行ったことに端を発します。

関東大震災後の復旧過程で、新聞の

発行部数が増大し、新聞の重要性が高まると、渋澤栄一（寄付者総代）らが、小野の研究をサポートし新聞講座を開設する募金活動を始めました。しかし学内の反対にあい、講座を開設できず、なるべく早く開設する約束で寄付を受け取り新聞研究室を作ることになりました。

昭和4年（1929）年に新聞研究室が設置され、講座開設の代わりに法文経3年の学生を選抜し課外の特別指導を開始しました。

### 【戦後】

第二次世界大戦後、GHQが日本の政府／大学に対し、ジャーナリストを養成する学部を作るように勧告を行いました。東大にも南原総長を訪ね、

学部の開設を非公式に勧告しました（1946）。それに対し、大学は新聞研究室を研究所に発展させ、学生に教育を行う計画を伝えました。

1947年に新聞研究所管制案が作成されます。当初は、研究所が学生を教育することに法制局から異議がでます。しかし最終的に設置目的を「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」（国立学校設置法1949）とする事で、研究所に学科を設置し学生の教育を行う事に了解が得られ法律になりました。この法律が教育部の根拠法になります。

こうして設立された東京大学新聞研究所の初代所長に小野が就任し、翌年



1950年4月から、新聞研究所教育部の学科課程が開講になりました。教育部の始まりです。

授業の内容は、新聞言論、新聞史に始まり、報道／編集／論説の実習、広告論や新聞経営、放送事業など多岐にわたるもので、出願の資格は東大／他大に在籍し1年次の課程を終えた者、大学を卒業した者などで、毎年50名前後が入所しました。

研究所の研究内容は、当初の新聞を中心にしたものから、数年をたたずに総合的なマスコミュニケーションの研究機関に変わっていきます。

1974年からは新聞研究所は、マスコミに関する研究に加え、社会的情報・コミュニケーション研究も視座に置くことになりました。教育部の教育内容

もあわせて変わっていきました。

### 【組織変更】

1992年になると、新聞研究所は社会情報研究所と一緒に、新聞研究所教育部から社会情報研究所教育部に名称が変わります。学則は引きつがれ、教育部課程の授業は継続して行われました。授業は、新聞／出版／放送論、に加え、情報〔産業／メディア／行動／政治／文化／経済〕論、など情報化社会をテーマに幅広く行われ、自治会によるゼミ合宿も盛んに行われました。

その後、2004年の国立大学の法人化の際に、社会情報研究所は、大学院組織である情報学環となり、社会情報研究所教育部は、大学院情報学環教育

部として継承され、現在の形になり、学則は一部変更になりました。受験資格は、出願時に大学に在籍または卒業している者、但し入学時に大学院に在学している者は入学資格がありません。（詳しくは最新の入学案内を参照）

2008年には、オシャレな福武ホールが完成し、学際情報学専攻の大学院生と共に教育部課程の教育部研究生も、スタジオやコモンズを利用して勉強できるようになりました。そして今日も、教育部の正規課程の修了生を数多く、マスコミや広告業界、情報産業界などに輩出しています。

『東京大学百年史 部局史四』、『新聞研究五十年』（小野秀雄著）、公式 Web より  
（文責 角尾弘）

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

# Lessons ▶

教育部では、他では受けられない多種多様な授業を受けられます。アカデミックな座学はもちろん、フィールドワークやVR作成まで。きっとあなたの受けたいものが見つかります。

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

# 特別講義（教育部概論）

教育部に入ったらまずこの講義の受講をオススメします。学部でもない、大学院でもない、特殊な位置付けにある教育部。それはどのような組織なのか、どんな専門分野を持った教員がいるのか知ることができ、いわゆる「教育部概論」とも言えます。各教員が2回の講義で、彼らの専門領域について概説。その分野は科学技術社会論から医療統計、ヒューマンマシンインタラクション、法学など多岐にわたります。

メディア・ジャーナリズム分野に興味があり入学した筆者だったが、こんなに幅広い視点から「メディア」を扱っているのかと度肝を抜かれたものです。と同時に、今まで触れたことのないような分野が多く、自分の新たな興味関心を知ることができます。筆者自身の体験としては、暦本純一教授が研究する人間とコンピュータが協働し、新たな身体感覚や人間的な機能の拡張をもたらすヒューマンオーグメンテーション分野について、障がいを持つ妹がいる身として、このようなアプローチ方法があるのかと、感心したのを覚えています。思いがけない出会いもある（かもしれない）特別講義、ぜひ受講してみてください。

（文責 友清雄太）

## メディア・ジャーナリズム論講義

教育部の最大の魅力は、プロのジャーナリストである講師と対面で（あるいは画面越しに）接する機会を得られることなのではないか。私がそう強く実感したのが、ノンフィクションライターの石戸諭さんによる、この講義でした。テーマは「インターネット時代における、ニュースの役割とは何か？」で、大変面白い内容だったのですが、私はむしろ内容以外の部分が印象に残っています。一見本題と関係ないような雑談の裏に垣間見える、高い情報収集力。そして雑談が始まったと思いきや、いつの間にか核心に迫っている、巧みな授業の構成力。こうした、いわば「プロの技」を、著作を通じてではなく直接体感することが、日頃の学業や研究など他の場面でも生きてくるのではないかと思います。

皆さんも教育部に入学された暁には、ぜひいろいろな方の技を「盗んで」みてはいかがでしょうか。なお、石戸さんは2020年度いっぱい教育部を離れられましたが、この講義の内容は石戸諭『ニュースの未来』（光文社新書、2021年）にまとめられています。教育部の入試の対策本としても、教育部の授業の雰囲気を知る資料としてもお勧めです。

（文責 小田泰成）

# 情報技術論講義（VI）

「ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI)」という聞き慣れない単語。

「使用言語は日本語と英語」という表記。授業計画に並ぶ英語のタイトル。シラバスを見たときは、「うわ、難しそう！」というのが第一印象でしたが、文系の授業だけでなく理系の授業も受けられるのが情報学環のいいところ、と前向きに捉えて受講しました。

英語で難しい内容を言われたらどうしよう…とと思っていましたが、アリ先生も日本語で講義して下さいますし、資料映像は英語でもおおむね理解可能。

私たちの生活の中にある不便さ、不自由さを、いかにテクノロジーで解決していくか。またユーザインタフェースを工夫することで、いかにより使いやすいものにしていくかということ、事例や研究の紹介を通して学べる講義です。

今まで何も考えずに使っていたものにも、最新のテクノロジー、細やかな工夫が詰まっているのだ、ということを知ると、生活の中の様々なものの見方が変わります。

濱田先生、アリ先生という2人の先生がいらっしゃることで、講義の中での話が広がる場面もあり、最先端の内容に反して授業の雰囲気はほのぼのしています。シラバスを読んだだけでは分からない魅力のある講義なので、難しそうと思った方にこそ取ってほしい授業です！  
(文責 森菜緒)

## メディアジャーナリズム論研究指導

### in 福島

教育部唯一のフィールドワーク。2泊3日を通して、原発事故の大きな被害を受け、東日本大震災から10年が経った今も街の多くが帰還困難地域となってしまう福島県双葉町と浪江町の現在を見つめます。指導をして下さるのは、原子力災害や自然災害に関する社会心理やリスク・コミュニケーションの研究をされている関谷直也先生です。

初日は、廃炉資料館、福島第一原子力発電所を見学し、廃炉の状況について理解を深め、2日目は、請戸小学校、伝承館、現在も帰還困難地域となっている双葉駅周辺の見学を通して、複合災害である東日本大震災の被害の大きさを目の当たりにしました。最終日は、地域報道に携わる方、震災後に双葉町に移住した方にお話を伺い、これからの地域のあり方について考えさせられました。

フィールドワークに行き、原発事故が地域に与えた影響の大きさを目の当たりにしました。また、感じたことを教育部生同士で共有することで、自身の学びも深まったと感じました。  
(文責 中尾聖河)

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育  
自主部  
ゼミ  
の  
行事

座談会

アンケート

施設・情報

# 情報社会論実験実習

情報学環教育部の授業は「アカデミック」でありつつも実践的な内容が多いのも特徴だと言えます。その中でもオリジナリティが高いのが渡邊英徳先生の情報社会論実験実習です。授業内容を端的に言いますと白黒写真をAIを使ってカラー化します。

渡邊先生は、原爆投下前後の広島の写真をカラー化しており生徒さんとの共著で書籍も出されています。出来上がった写真はネット系メディアである『ハフポスト』にも何度も取り上げられ話題にもなっています。授業では半年かけて自分でテーマを決めた事柄の複数の白黒写真のカラー化を目指します。AIといっても使うエンジンは複数ありどれも難しいものではありません。この授業で大事なことは、写真をカラー化することは歴史を紐解くことだということです。AIは100%ではありません。AIによって予想する色も違います。人々の衣類はのころ何が流行っていたのかな？バスや電車の色は当時どうだったのかな？私は博物館に行ったり、色の流行を調べたりして選定していきました。そうして出来上がった写真は人々の息遣いや躍動感を感じるものです。

皆さんも写真を歴史から現代へ「解凍」するような作業を体験してみませんか？

(文責 小磯尚文)

# メディア・ジャーナリズム論実験実習

## ドキュメンタリー製作

ドキュメンタリーを1からつくる。この講義がなければ私はドキュメンタリーを制作することはなかったかもしれない。映像編集技術もインタビュー経験もない私でも一つの作品が作れるという自信に繋がりました。今なら「私は映像編集ができます」と胸を張って言えます。指導してくださるのは、元日本テレビプロデューサーで、現在も数々の作品に携わっていらっしゃる日笠昭彦先生。例年はグループごとに制作をしていたが、昨年度はコロナ禍のため個人での制作になりました。初めての映像作品制作が個人作業かつリモートでの指導という点に不安を抱いていましたが、そんな不安は不要でした。個人の進捗状況に合わせて授業時間外でも丁寧にアドバイスを下さりました。どんな映像が必要か？分かりやすくする為にはどんなナレーションが必要か？伝わりやすく、興味を引く映像はどんな映像か？考えるヒントをいくつも頂きました。Zoomでのインタビューや個人パソコンのiMovieでの編集など、コロナ禍だからこその制約が多かったですが、それでも完成した作品はそんな制約を感じさせないものになったと思います。常に寄り添いながら指導して頂けるので、映像作品初心者こそお勧めしたい講義です。(文責 中島悠夏)

# 情報技術論実験実習

この授業では、毎年11月に開催されるメディアアートを中心とした展覧会である東京大学制作展の作品を制作します。制作展は大学院修士1年生が主体となって運営します。受講生は、情報学環に所属する各人の専門を超えた学際的な繋がりを強みに、作品制作に挑んでいます。約20年続いているこの展覧会がきっかけで、大きく世に出た人や作品が多数あります。

7月に開かれたExtra2021「OPUNK」は、11月の制作展に向けた実験的プレ展示で、私は江戸時代に紙工作として流行った浮世絵の「組上灯籠」を実際に制作しました。11月に向けては、0歳児の体験ができるVRやゲーム、モーションキャプチャーを使った展示などを企画しています。

入学して、どんな授業でどんな人が参加するのかしつかりとわからないまま、制作展の授業を受講しましたが、画面にがやがやと人がいて、会話から熱気を感じ、おもしろそうという直感だけで参加を決めました。私に情報工学の技術・知識が少ないためハードルは高いですが、大勢の情報学環の先生方や先端技術分野で活躍される先輩方から親身なアドバイスをいただけます。教育部生の参加は少ないですが、情報学環ならではののおもしろさや発見が多く、参加した感のある授業です。ぜひ、展示会アーカイブも参考にしてみてください。<https://iiiexhibition.com/> (文責 東出りさ)

# 情報技術論講義 (VIII)

もしCOVID-19に感謝するものがあるとすれば、未曾有の感染症に対し、真正面から立ち向かう最前線のカッコイイ大人たちの姿を目にすることができたことだと思います。

現代のメディアにおいては、科学に基づいた感染症の情報をいかに正確に大衆に届けるか、という点や、長い自粛で制限された活動の中でどうエンタメを届けるか、という点が社会的な課題として浮かび上がっていたと思います。

それに対し、オトナたちは多種多様な方法で策を講じていました。コロナ禍でリモートを強いられても恙無く放送を続けるテレビ局の工夫、自粛からメンタルの不調で窮地に陥ったアーティストを支援する音楽業界、人の集中を避けるため、時間帯を分けたクーポンを配布するOOH広告のアイデア。急激に変化する状況に必死で対応しようとするメディア業界のオトナたちの姿を、リアルタイムで感じることができる、いかにも情報学環らしく最高の講義でした。(文責 井床友哉)

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

# Students ▶

様々な経歴を持つ人が集うのも教育部の大きな特徴。大学二年生から大ベテラン社会人まで、新しい交わりがたくさん生まれます。

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

## 石橋 正人

教育部 1 年目で社会人の石橋正人です。これまで映像制作・イベント制作・インターネット広告営業を経て、現在はテレビ局でデジタル事業の推進を担当しています。私の入学目的は「①これまでのメディアビジネスの経験に、今回の教育・研究からの知見を加えて、視野を広げる事で、自分自身のスキルアップと、新規事業の立ち上げ時に活用をしたい。」「②現役学生や社会人といった多様な人達と一緒に学び、人脈という財産を得ることで、今後の自分の人生を豊かにしたい。」でした。入学して半年が経過しましたが①は早速実践できました。②についてはコロナ禍によりオンライン授業が多いですが、Slack などのコミュニケーションツールを活用してネットワークが徐々に広がっています。授業は夕方から夜の開始が多く、対面とオンラインのハイブリットもある為、社会人でも出席しやすい環境です。教育部に在籍して何歳になっても学ぶことが楽しいと改めて感じました。今後も非常に楽しみです。



## 小竹 朝子

教育部 1 年目の小竹朝子です。新聞社勤務を経て、東大広報課で大学のニュースサイト UTokyo FOCUS 用の取材や編集をしています。頭の切れる学部生を主な対象としたプログラムに、リカレント教育気分でおじゃましていいのだろうか、と恐る恐る入学したのですが、研究生の年齢、専攻、職業や関心領域が予想以上に多様で驚きました。情報学環の教員やメディア・広告産業の実務家による講義は、目から鱗的な学びの連続です。そして何より、コロナ禍にも負けず積極的に展開される自治会活動が素晴らしい。日々、Slack で細やかな連絡や交流が行われ、慣れない履修登録に手こずる社会人学生にも誰かが優しく手を差し伸べてくれます……。自主研究発表会では「こんなことも研究対象なの？」と思うほどのテーマの幅広さに、改めて教育部の懐の深さを実感しました。メディアについて考えてみたくなったら、ぜひ教育部の門を叩くことをお勧めします！



## 小林 千菜美

教育部2年目の小林千菜美です。本所属は日本大学法学部新聞学科です。本所属のゼミナールでは、映像ジャーナリズム研究をしており、テレビの震災報道や障害者表象に関心があります。情報学環の「実践的な学びの場」に憧れを持ち、本所属で学んでいるメディアに対し、より専門的に、且つ能動的に関わりたいと思い、受験を決めました。

本所属では座学の講義が多く、自分の意見をアウトプットする場が少ないことにモヤモヤしていました。ここでは、自分の考えを周りに発言できるだけでなく、ドキュメンタリーなどの作品を通じて、社会への問題意識を形でも残す事ができます。

私自身は自治会の副会長も務めさせていただいています。講義外では多くの研究生、ホームカミングデイではOB・OGの方と関わる機会があり、毎日刺激的な日々を過ごしています。一つの教室に、多種多様なバックグラウンドを持つ人間が集まり、議論を繰り返すことで、他の環境では成立しないであろう不思議な面白さがここでは毎回生まれています。人が持つ肩書きや枠を超え、今の「あなた」のままで情報学環の扉を叩きにきてください！今以上に素敵な学びの空間を皆さんとつくっていただけることを楽しみにしています。



## 佐藤 美乃梨

本所属は東大工学部社会基盤学科3年で、インフラについて勉強をしています。志望した理由は、災害について構造的なハード面を本所属で学び、避難時の心理状態や災害記憶の伝承などソフト面を教育部で学びたかったから…でしたが、今の関心は、社会問題におけるメディアの役割についてです。教育部の魅力はなんといっても学生のバックグラウンドが多様なことです。

社会人と学生として接しているのは不思議な感覚で、ゼミでは世代、業界、地域の違いなどによって社会問題の切り取り方が違うのが面白いです。授業で言えば、メディアの第一線で活躍されている方と一緒に映像制作をしたり、長い間記者として働いていらっしゃる方の力を借りて取材をしたりなど、ジャーナリストらしいことも多く体験できます。「メディア」に少しでも関連する興味を持った方であれば誰でも楽しめると思います。学年、専攻に関係なく多くの方に是非教育部の学びを体験していただきたいです！



挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

## 篠原 翼

教育部 1 年の篠原翼です。本所属は東大文科二類で、経済学部に進学します。教育部に入ったのは、高校生の時より興味を持っていた新聞をはじめとするメディアについて、現場の話も含めて知りたい、というのと、単純に色々な人と知り合いたかったというのも本音です。ご時世的に友達を作りづらかったのもあるので（笑）。いざ入ってみると、社会人の多さに始めは驚きましたが、皆さん面白い経歴をお持ちで、話しているだけでその知見の深さに圧倒される毎日です。自分も何か強みを見つけてやるぞと奮起させられています。メディアについて学ぼうと思っていたのですが、今のところそれ以外の講義を受講しています（時間割の都合上）。それでも、教育部でなければ知る機会もなかったであろうことを学べてとても充実しています。自分にはハードルが高いなあと感じている人もいるかもしれませんが、飛び込んでみればなんとかなります！入ってから何をするかです！



## 平松 優太

都内官公庁で働く社会人です。本職では広報部門で情報政策に従事しています。現在は個人情報法制の官民一元化に携わっているのですが、日々の業務の中で、法律と情報技術の専門家の間で考え方に大きな溝があり、そこに国民的な不安が横たわっている現状に課題を感じていました。文理融合は、まさに「言うは易し行うは難し」ですが、情報学環はこうした研究と実践の最前線の間だと知り、門を叩きました。また、休日はボランティアで、映画にちなんだまちづくり NPO の運営やリトルプレスに関する活動も行っているため、平日も土日も情報メディアに関わる自身の活動をアップデートさせる気概で授業に臨んでいます。生まれも育ちも勤め先も東京都の身ですが、学び舎としての東京大学の地の利も活かし、なんとか両立させて邁進しています。是非皆様とも一緒に、玉石混淆で刺激的に学んでいけたら幸いです。



## 前田 春貴

こんにちは！教育部1年生の前田です。将来的にメディアに携わることを昔からの夢としていて、面白いコンテンツの作り方と情報の送信者としての倫理を学ぶ、という正統派の動機で情報学環に入りました。さまざまなバックグラウンドの方が想像以上に多く、一人一人が積極的にアクションを起こしていることに感銘を受けています。現にこのパンフレット制作に携わっている方々も数十人に上り、学環のエネルギーを感じます！本所属は東京大学文学部社会学専修で、コミュニケーション論について学びながら、煌びやかな同級生と会話の練習をしています。情報の送受信について2側面で学んでいるのは、噛み合いが良いのかな、とも思います。自分が学環を知ったきっかけは大学1年の時の関谷先生の授業でした。これがなかったら入ることはなかったと断言できます。学環は今、知られていなさすぎです。一人でも多くの人に魅力が伝わることを願っています！



## 溝脇 由女

教育部2年目の溝脇由女です。本所属は教育専門の大学（東京学芸大学 美術専攻4年）で、このまま教員になれば学校の中だけで完結する人生設計になり社会の大部分の実態をまるで知ることができない危機感がありました。そんな中、情報学環の「社会を指向する芸術のためのアートマネジメント育成事業（AMSEA2019）」の聴講に友人に誘われて何度か通い、すすめられた受験説明会に行き、特殊な研究生制度の存在を知りました。学校教育の外の世界のことを知り日本の美術の道を拓く糧にしたい、という気持ちがあったため受験しました。入ってみると思った以上に講義のジャーナリズム色が強く、少し困りましたが、良かったことは東京大学制作展に参加できたことです。（画像は同展示出展「草を生やして絵を描く」の作中の自画像です。）制作の中で必死に得た技術や共同制作者、教授の方々とのつながりは人生を変えたと言っても過言ではありません。学環のヨコの繋がりは遥かな大きさです。貪欲に学んでいれば想像もつかない未来に続いていくかもしれません。



挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の  
自主ゼミ  
行事

座談会

アンケート

施設・  
情報

# Events

# Seminars ▶

教育部では、各々が興味のあるテーマについて研究する自主ゼミをはじめ、様々な行事があります（コロナ禍で縮小中）。ここでは、今年度はどんな研究をしているのか紹介します。

## 自主ゼミ

コロナ以前は合宿として行われていましたが、コロナ禍以後は自主ゼミが行われています。それぞれの研究したいテーマに基づいた班が結成され、3、4ヶ月ほどかけて研究発表の準備を行います。詳しいことは次項で紹介していますので、そちらをご覧ください。

## ホームカミングデー

10月中旬のホームカミングデーでは、自主ゼミの成果を、各班が発表し、先生方に講評していただきます。またそれが終わった後は、教育部のOB・OGによる進路相談会や雑談会が行われます。

## パンフレット作り

このパンフレットは、教育部について多くの方に知っていただきたいと、研究生有志が作成しています。デザイン班、アンケート班、インタビュー班、写真班、校閲班などに分かれ、各ページの企画・編集を担当し、印刷・製本まですべて行っています。

## 修了式

3月には、修了式が行われます。現役生と修了生がともに修了を祝い、教育部の1年が終わります。修了証書に加え、自治会から記念品の授与も行われます。卒業後もOBOGとして同窓会を通して、教育部とつながっていきます。

## 教育部自治会

「東京大学大学院情報学環教育部自治会」を正式名称とする教育部研究生の互助組織です。会長、副会長、会計など、毎年3～4名が自治会委員として活動して、多種多様な学生が所属する教育部を引っ張っています。執行部を中心に、情報学環の学務係や先生方、OB・OGの方々と連絡を取ったり、研究生室の管理をしたりしています。また、研究生どうしの親交を深めるイベントや、自主ゼミ、ホームカミングデーのイベント開催なども行います。一般的な大学自治会というよりも、高校の生徒会のようなイメージです。

# 自主ゼミとは？

情報学環教育部では、毎年9～10月に2泊3日で合宿が行われていました。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2年間合宿の開催ができませんでした。それに代わり、自治会執行部一同が中心となり、代替措置として自主ゼミ活動をスタート。2021年度は研究生が自分の興味のある分野を選んだ上で、7つの班が結成されました。10月のホームカミング日で中間報告を行い、12月に最終の研究発表を行います。研究発表は、のちにレポートに内容をまとめて提出し、合格すれば単位として認定されます(教育部在学中2回まで)。

今年の中間発表も、オンライン開催ではありましたが、非常に多種多様で教育部の面白さを再認識する良い機会となりました。一人ひとりの研究生のバックグラウンドが様々で、先生方やOB・OGの方との議論も白熱しました。自分が発表するだけでなく、他の研究生による発表に触れることで、自分の興味関心以外の領域も学ぶことができます。コロナ禍で研究生同士の交流が例年と比べて少なくなっていました。自主ゼミを通じて教育部生である実感が持てた研究生も多いのではないのでしょうか。

次のページからは、2021年度の自主ゼミに参加した各班の代表者による、自主ゼミでの活動についてのコメントを載せています。ぜひこれを読み、情報学環教育部の雰囲気を感じ取ってみてください。

皆様が入学を迎える際には、例年通りの合宿が行われていることを願っております。



# 今年度のゼミグループ

- ・ ジェンダー
- ・ ジャーナリズム
- ・ テレビ
- ・ SDGs
- ・ 教育
- ・ インターネット
- ・ 地域

## ジェンダー

ジェンダー班では「『女性』の居心地の悪さ・もやもや」をテーマに、各々が興味のある分野を調査しています。

中間発表では、「ジェンダーと月経／生理」、「女芸人のフェミニズム」の2つについて発表しました。

私のテーマである「女芸人のフェミニズム」ではお笑いにおける容姿いじりや女性芸人のメディアでの位置付けについてフェミニズムの理論と照らし合わせて分析することを考えています。特にここ3年ほどで、女性芸人がお笑いの世界が男性中心的であることを指摘する場面やネタの中でそれがテーマにされることが増えてきていることに注目しています。基本的には書籍や雑誌記事、また芸人のインタビュー記事やテレビ番組を調査していく予定ですが、ジェンダー班内でもそれぞれに異なったテーマで調査を進めているので、それぞれのテーマについて報告、議論を深めることで充実したレポート執筆に向けて協力していければと思います。

(文責 上野菜津)

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

# テレビ

皆さんはテレビをよく見ますか？ テレビ班にはテレビっ子もいれば、テレビをあまり見ない人もいます。その中で、「ドラゴン桜2のセリフから読み取る東大のイメージ」「人気ドラマは続編を制作すべきか」「テレビの『自己浄化力』、倫理」というテーマで班員がそれぞれ興味関心のある分野を研究しています。

班員が3人と少ないですが、1.2週間に1度のZoom会議でお互いの研究への意見を交わすなど、“少数精鋭”で活動中です。教育部にはTV業界で活躍する社会人の研究生も複数いるので、貴重な生の声を気軽に聞くことができるのも大きな利点となっています。

娯楽の多様化やYouTubeなどの台頭により、以前ほどの隆盛ぶりは影を潜めているテレビですが、だからこそ研究する価値があると思っています。教育部にはテレビマンや業界に精通した教授・講師がいるので、授業だけでもテレビを学ぶ機会がありますが、さらにその見地を深めたい人がいたら一緒に研究してみませんか？

(文責 和田秀太郎)

# 教育

「教育」をキーワードに集まった個性豊かな5人で楽しく議論をしています。班員は、ボランティア経験をしている人、議員さんのところでインターンシップをしている人、社会人として社会課題を俯瞰的に見ている人など様々なバックグラウンドを持っています。個人の関心分野を一つの発表として集約するのは大変ですが、「貧困子供状態にある子供にとって、セカンドプレイス（学校）、サードプレイス（居場所）は学び場になりうるか」というテーマに取り組んでいます。子供の貧困とは何か、社会の居場所はどうか変化したか、学校、企業、行政はどのような取り組みをしているのか、などの角度から研究、インタビューを進めています。

アドバイザーとして、教育の現場にも関わる東京大学教育学部教授の植阪先生をお迎えし、さらに学びを深めていきたいと思います。12月後半の最終発表には、多くの方をお招きし、成果をお見せできるよう努めていきたいです。

(文責 佐藤美乃梨)

# 地域

地域班では、情報学環の吉見俊哉教授が指摘する「五輪というお祭りドクトリン」をヒントに、各自が選定した各地域に関する計画等とコミュニティの関係性を研究しました。

特に、伝統的な都市計画手法から今日的なまちづくりへと我が国のタウンプランニングが変容する中で、どのような条件下で計画等が作動し、それに沿ったステークホルダーによる有用な行動が執られていくか等を主要な 이슈 としました。

調査手法としては、各地域に関する文献等の先行研究やフィールドワーク、インタビュー等を行い、我が国における都市計画史のダイナミズムに調査対象地域を位置付けようと試みました。

都市計画によって高度に整備された地域と市民主体のまちづくりによって地道に形成された地域の特性を通して、アフターコロナや人口縮小時代における地域コミュニティの持続可能性を、今後も模索していきたいと思います。(文責 平松優太)

# ジャーナリズム

わたしたちの班では、「政治的現実とメディア」を班としてのタイトルに据え、それに基づいてメンバーが各々の関心に沿った個人研究を進めました。無数の変数によって規定される政治的状況は極めて複雑で捉えがたいものではありますが、こうした政治の「今」を表象を見つめることを通して考えようという意図で研究テーマを設定しました。

各々が着目した切り口は「政治ドキュメンタリー映画における笑い」や「中国の戦略的コミュニケーション」、「日本人の社会運動離れ」そして「パンデミック下の陰謀論」と実に多様なものになりました。

このように、断片的なメディア(媒体)から政治的現実を構成的に考えていくのはメディアの多様さゆえに難しいものですが、むしろ「今」を生きる者としてその捉えがたさの只中に立ち尽くすことが我々にとって大きな財産となったことと思います。(文責 山本風路)

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

# SDGs

ジャーナリズム、ジェンダー、SDGs… 幅広いテーマの中から興味があるテーマを選び、研究を行っていく自主ゼミ。

自分の班では「SDGs・ESG」をテーマに「SDGs ×○○」「ESG 投資」といったものから、さらに進んだ「反出生主義」に至るまで、各自が幅広い小テーマのもと研究を進めた。小テーマに関しては各自が独立した作業となるが、グループでの意見交換や進捗の共有を通して他の小テーマから刺激を得ることができた。加えて、中間発表等で教育部の先生からのフィードバックをいただくことができ、最終発表会ではグループのテーマに関する識者をゲスト講師として呼ぶことができるため、個人での研究とはまた違った形で見識を深めることができるだろう。

幅広い分野の授業が開講されている教育部であるが、自身の関心についてより深く研究ができる内容になっている。授業で扱っていない、あるいはもっと理解を深めたいテーマについて、進んだ学びを得たいという研究生は是非とも参加するよう勧めたい。  
(文責 田中皓太)

# インターネット

私たちの班は「インターネット班」という名前で集まりましたが、VR について、IT サービスの顧客獲得戦略について、オンライン上でのコミュニティの在り方について、SNS での若者世代の発信について、ネット上のコンテンツの依存性について……などなど班員の間で興味の幅が広がった班だと思います。これも「インターネット」というものが現代社会において影響を与えている領域の広さの表れなのかもしれません。

そのような状況に対応して、個別に興味のあるテーマについてスライドを準備し、それを共有するミニ発表会のような形式で7月下旬から月に1~2回ほどのペースで活動を行いました。

振り返ってみて、準備した内容についてリアクションがもらえて、それに答えるチャンスとしてまた次回があるというのは自分の中で漠然としていた問題意識を問いとして固めるために貴重な場だったと思います。

残り2か月ほど、最終発表会に向けて走り抜きたいです！ (文責 川口翔太郎)

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

2021.10.16

# テレビドラマ『ドラゴン桜2』のテキスト分析

## ～セリフから読み取る東大のイメージ～

教育部5A210310 小竹 朝子（おたけ ともこ）

SDGsifl.pptx - Google スライド

https://docs.google.com/presentation/d/1xADusVUP6fgeSltlmqtbSg\_bt...

### 班のテーマ概要

SDGsという大テーマのもと、それぞれのメンバーが関心のある領域の研究トピックを設定。  
→4つの領域に対応できるゲスト講師の方をご存じの方、ぜひご紹介くださいませ。

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

# Discussion

# Q and A

# Facilities ▶

今年度入学した研究生に、教育部について語らいあっていただきました。これまで、今、そしてこれからのこと。生きている声をお届けします。

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報

# 研究生による座談会



教育部の実状をより知ってもらうために、現役研究生3人に集まって教育部についてざくばらんに語ってもらいました。教育部にはどんな人がどんな目的で集まっているのか、リアルな話を聞くことができました。 (聞き手：円光門 文：日比杏南)

円光：まずは自己紹介をお願いします。

小林：教育部2年目の小林千菜美です。

本所属ではメディアを学んでいます。

平松：教育部1年目の平松優太です。

平日は東京都庁で働いていて広報関係

の仕事をしています。休日は地元のNPOにも参加しています。

園田：同じく教育部1年目の園田寛志郎です。60歳、社会人35年目で、新聞社のカメラマンをしています

## ——昭和のメディア論を上書きする機会がほしかった

円光：皆さん、経歴が多様ですね。なぜ教育部に入ろうと思ったのですか？

小林：私は本所属である日本大学（法学部新聞学科）でも同じ領域であるメディアを学んでいるのですが、そこでの講義は座学が中心で、自分の考えや意見を発信する場が少なかったように

感じていました。そんなときに教育部の存在を知って。メディアというものに向き合うためにも自分の考えを発信して、他の人の考えを享受する必要があると思ったので受験することを決めました。

平松：私は平日（広報関係の仕事）と土日（NPOでのリトルプレス活動）に

やっていることのアップデートをしたいと思い、情報学環に入りました。平日の仕事ではなんだかんだ5年くらいメディア活動をしています。みなさん我流で仕事をこなしていて。情報が流動しやすい現代社会には我流で生き抜くよりもしっかり学びを得たいと考えました。休日に行っているNPOのリトルプレス的な活動もこれまた我流なのですが、それは7年くらい続いています。NPOは設立して3年で潰れるとよくいうので、ここまできちんと続いているのなら自分のなかでのメディアというものをしっかり確立したいと思い入学を決めました。

**園田**：新聞社カメラマンとして35年間活動している自分が学んできたのは、昭和のジャーナリズム。それはとにかく”新聞”というイメージでした。今までを振り返ると平成時代を駆け抜けた



▲ 園田寛志郎さん

感じがしますね。もう、平成ではなく令和になりました。90年代からはじまったインターネットが、新聞・出版とは今では立場が逆転していることを実感します。そんな自分としては、昭和のメディア論を上書きする機会がほしかったんです。

## ——今は誰もがお手軽に綺麗な写真をiPhoneなどで撮れる『一億総カメラマン時代』

**円光**：なるほど。みなさん本所属は東大以外にあるということですが、実際に教育部での学びが本所属で活かした経験などはありますか？

**平松**：私はまだ撮取中ですかね…。これから学んだことを内省して、自分の土壌へと整地していきたいと思っている最中です。ただ、都庁で働いていて日頃公文書を作っている身としてはVR

の授業が非常に印象的でした。複数人のチームでバーチャル空間を作るワークショップなのですが、VRって私が触れたことがなかった領域だったんです。公文書には正しさが求められる、けれどもVRは本物でないものを映すことができますし、そういった意味でもまったく新しい形のメディアを体系的に知ることができたのは良い経験でした。

**小林**：私はやはり本所属でも同じメディ



▲ 小林千菜美さん

アという分野を学んでいるからか、活きているとすごく実感します。なかでも実際に福島県にフィールドワークにいった授業は本当にためになることが多くて！本所属では映像ジャーナリズムを研究するゼミにいますが、震災報道を研究していたときはその授業での経験が特に活きたと思いますし、特に“現場に行くことの大切さ”を強く

学びました。テレビの中だけの福島を見ることと実際に行くことは全く違うので。あとは他の研究生が言った何気ない一言が印象に残ることが多かったので、本所属で共有したりするととても会話が広がり、議論に深みが出るように思います。

**園田:**自分が記者になった35年前には、新聞業界における商売なんて何も考えていなかったんです。販売部門とか、「けっ！」て思ってたかもしれない(笑)。だけど広告の授業を履修して、そうか、金が潤沢だからこそ自分たちは記者ができたのか、という気づきが得られました。今は誰もがお手軽に綺麗な写真をiPhoneなどで撮れる『一億総カメラマン時代』ですから、写真の果たす役割が昔とはやはり変わっていますよね。そんななかでカメラマンの専門性をどう見いだすのか、それを考えさせられます。

## ——安い学費、文理の枠を越えた学び

**円光:** そうなんですね。みなさん教育部での学びが非常に充実されているように感じたのですが、教育部の良いところを挙げるならどこでしょう？

**平松:** 教育部を知ったのはインターネットでしたが、まずは金銭面で財布に優しいことに驚きました。

**小林:** 私も本所属が私立なのであまりお金はかけられないな…と思っていた

のですが、学生が自分で払えるくらいには安いですね。

**園田:** なかでも東大生はお金がかからないのだから入るべきですよ！

**平松:** 社会人学生をやりたい人って、他にももっと選択肢はあると思うんです。だけど、現役生がいるという感覚と先生方が非常に魅力的という点もあるのにこんなに安い学費であることは本当にすごいですよね。

小林：たしかに。あとは文理の枠を越えた学びを得られるのも珍しいですよ。勇気を出して理系的なデジタル・トランスフォーメーション（DX）とかの授業を履修してみたんです。専門的な内容にもかかわらず、理解できることに驚きました。文系の私ですが置いてけぼりにされている感覚が全くなかったのはすごい空間だと思います。



▲ 平松優太さん

## ——いろいろな学び直しの機会、定期アップデートに

円光：今後は教育部での学びを具体的にどのように活かしたいですか？

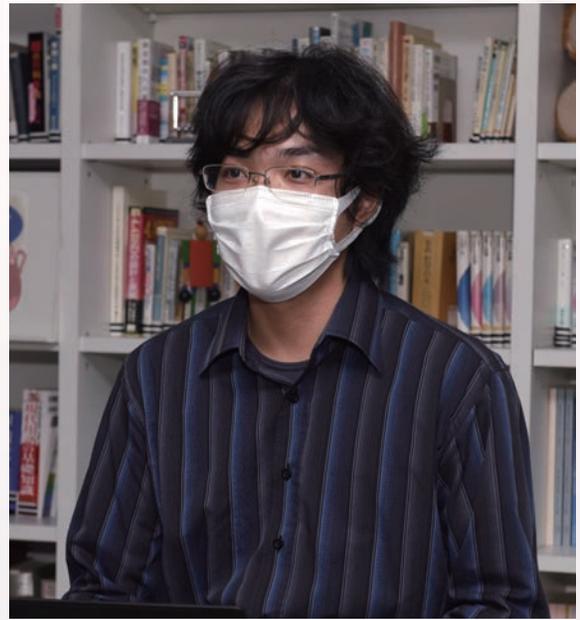
園田：それがわからないから面白い！逃げじゃあないですよ（笑）。教育部は”文理融合”、”老若男女”を謳っているように、ここはまるで宇宙空間なんです。お若い学生である小林さんが何を考えているのかわからない自分にとっては、ここでの学びは”今”の人々の考えを学ぶ機会、逆にそうやって若い人に自分が何かを伝えることができたりするかもしれない。そういった相互の経験は長い未来に活かされると思っているので、まだわからない自分がいて、これからが楽しみです。

小林：私は来年から社会人として記者になるので、ここで学んだことを現場で活かしていきたいですね。なので園

田さんからのお話も活かしていきます！私の場合、学んだことと仕事分野が直結するので、自分も含めて色々な人が生きづらさとかがなくなるような社会への手助けができたらいいなと思っています。既存メディアが危機に入るなかでそれを逆手に取って色々なことをやっていきたいと思っています、私も園田さん同様これからが楽しみです。

平松：園田さんの話を聞いて思いましたが、20代で大学卒業、60代で定年というのは、寿命が短かった昔の話であって。いろいろな学び直しの機会があってもよいと思います。今の情報流動社会において、自分が得てきた常識の範囲内で定年迎えるまでやれるか？とってしまう自分がいます。20代の時に学んだ最新の知識が、あと40年

も持つわけがないので、定期的にアップデートする必要性を感じます。私はコロナ禍でリモートワークが普及してきた今、学べる時に学ぶことを重要視しています。そう考えると、ここで学ぶことは定期アップデートに活かせるかな。



▲ 円光門さん

## 後輩へのメッセージ

**円光**：ありがとうございます。教育部で学んでいるみなさんだからこそ現代社会に関して思うところがあるんですね。では、これから入ってくるであろう後輩のみなさんに一言お願いします！

**平松**：社会人なのでどうしても仕事もあって、地域のこともある…。時間を捻出することが大変ですが、逆に絞りきった時間は無駄にしないと心がけているとその分の学びは非常に大きなものになります。ここはかなり特殊な空間だと思うので、これを面白いと思えるなら絶対に入った方が良いでしょう。単純なインカレではなく、社会人もいて先生も超一流。なのに学費は安い。おすすめポイントが沢山あります。

**園田**：ここには自分に全く関係ないこ

とが学べる機会がある、これはとても凄いことだと思います。今の若い人を見てると、非常にもったいない気がします。学生のうちに沢山脇道にそれて、雑学を身に着けていってほしいです。

**小林**：もし少しでも教育部に興味があるのなら、今の素のままで入ってきてほしいです。私的には東大は大きな組織だし、自分の学力的にも他の大学から受験することにハードルを感じていました。だけど情報学環のいいところは何かしようと行動する人に対して否定はせずに後押しや協力をしてくれる、肯定から入ることにあります。素のままでいることができ心地よく頑張れる。好きなもの、興味のあるものを学びたい、話したい、聴きたいというその感情にまっすぐに入ってきてほしいと思います。

挨拶

歴史

授業紹介

研究生紹介

教育部の行事  
自主ゼミ

座談会

アンケート

施設・情報



▲ 情報学環本館正面

# アンケート

教育部生が学環を志した動機から、将来の抱負まで、たっぷり語っていただきました！

Q

学環に入った理由を教えてください！

A

ソーシャルメディアに興味があった

学生新聞に携わっており、本格的にジャーナリズムを学びたかった

マスメディアの持つ影響力に驚き、もっと詳しく知りたいと思った

メディアの変遷をみつめ行く末の予測・新しい事業を作ることへの興味

色々な人に会えると思った

社会学やテクノロジーの内容が多くあった

企業内研修が一気にZoomに移行したため情報技術の動向を掴む必要を感じた

漠然と大学で勉強し直したいと思っていたらたまたま見つけた

昭和、平成のメディア論の上書き

仕事以外のことに頭を使う機会がほしかった

Q

学環はどんな人におすすめですか？

A

好奇心旺盛な人！

積極的な人

ちょっと変わったことをしてみたい人

自分と違った考え方や意見を獲得したいと  
考えている方。同期生との雑談を通して知  
らない世界への扉が開かれます。

社会人で、もう一度勉強したいけど大学院  
はハードルが高すぎる、という人

技術と社会の関わりを考えたい人、たくさ  
んの人と関わりたい人

時間がある自由人

文理問わず、さまざまな知識に触れたいと  
思う人

「情報の媒介者」というものにフォーカスし  
た研究、学習に興味がある人

その他、「好奇心」というワードが圧倒的に  
多かったです！さまざまな人と出会える学  
環の特長が反映されていると思います。

編

Q

学環に入って良かったところは？

A

意識の高い仲間や研究のスペシャリストと  
出会い、良い刺激を得られる！

制作展に参加し、学府修士の方々と作品を  
作る経験ができた

現役生／社会人、東大生／他大生、理系／  
文系、業界、専門領域など様々な垣根を超  
えた研究生達の持ち味に触れられる

人との交流はもちろん、授業も面白い！

学部の本所属では絶対に無理だった内容の  
勉強ができた

素晴らしいカリキュラムとチャレンジの機  
会がありますね

実は他学部の授業も一部受けられるんです

東大リソース使い放題！

一応「東大」なので祖母が喜んでくれた

Q

学環を修了した後、どんなことをしたい？

A

企業勤めをしてみて、それが嫌になったらアカデミアに戻りたい

どういう道に進むにせよ、メディアのことは考え続けていたい

日本コンテンツが世界に継続的に普及・拡大していくための仕組みづくり

Q

学環に入って、どんなことが役立ちましたか？

A

- 1 専門外の分野の知見が広まった (87%)
- 2 メディアに興味がある知人が増えた (38%)
- 3 将来への準備になった (32%)

編

学環のリベラルアーツな部分が強調される結果に。学環をきっかけに将来を考える人も確かに多いですね！新卒キャリアを学環きっかけで決めた人もいます。



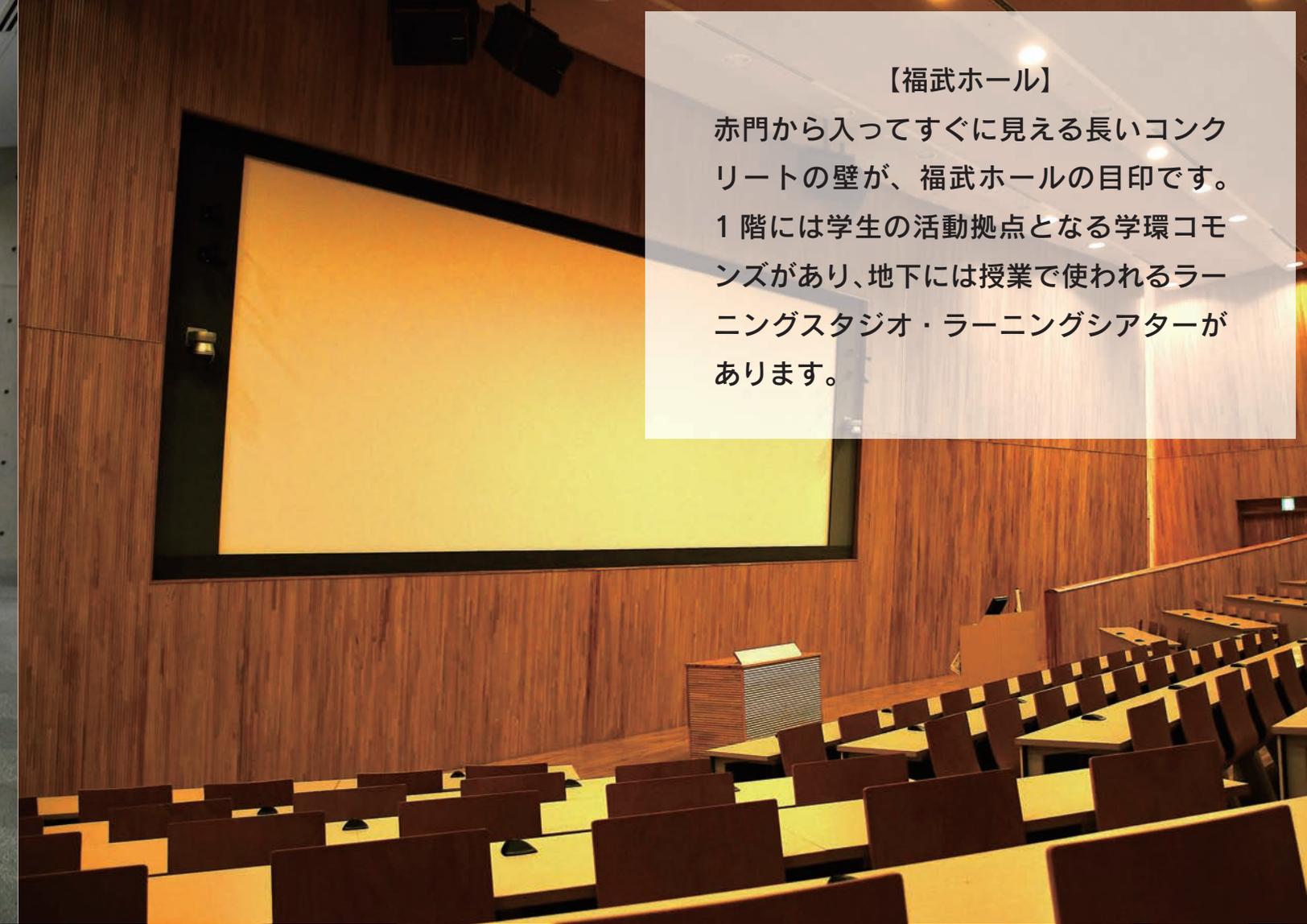
### 【学環コモンズ】

福武ホール1階にあり、教育部生のほか、学際情報学府のラウンジのような役割を担っています。コンセントが使える、水とコーヒーが用意されているなど、一人でも作業しやすい環境です。24時間使用でき、教育部生にとってすべての活動の拠点となる場所です。



### 【福武ホール】

赤門から入ってすぐに見える長いコンクリートの壁が、福武ホールの目印です。1階には学生の活動拠点となる学環コモンズがあり、地下には授業で使われるラーニングスタジオ・ラーニングシアターがあります。



# 入試情報

2022年度の入試は、一次試験は書類選考で、二次はzoomによるオンライン面接により行われる予定です。(2023年度以降は筆記試験が復活する可能性があります)

2021年度は、65人ほどが受験し、一次合格者は44名。最終的に36名が合格しました。(ここ数年、受験者は、65-75名程度です)

願書は、履歴書、学習計画書、受けてみたい授業、自己推薦書からなります。きちんと募集要項を読めているか、情報学環教育部で教育するのに足る人材か、を判定する材料で、一次選考の判断の基準です。

情報学環教育部のユニークなポイントとはどんな所で、どういった立ち位置の教育機関であるかを理解し、求めている人材に自分が合致している事をアピールしましょう。

## ・ 学習計画

学習計画については学習したい内容について、なぜ自分がそれを学習したいと思うのか、必然性がわかるように書かれると良いと思います。例えば

- 1) まず、自分の経歴、経験を記載します。
- 2) "1)"に関連づけて、どういう事に関心を持っているか書きます。
- 3) "2)"の関心から、何を勉強したいか書きます。

シラバスから、やってみたいジャンルを見つけて理屈を組み立てるのも有りです。

## ・ 受けてみたい授業

学習計画に書いた、何を勉強したいかに沿うように、シラバスから適当な科目を選んで記載し、学習したい理由や授業への期待を書きます。

## ・ 自己推薦書

人柄や、このプログラムでうまくやっていけそうかを見ると思っていますので、相応のアピールをすると良いかと思えます。大学としては修了する意思のある人を優先し入学させる必要があります。

## ・ 面接試験

学生1名対面接官の先生が2名で、約15分の試験を受けます。内容は、志望動機や学習計画の確認など、願書に記載の内容を中心に、興味の内容、やる気、修了する意思があるかの確認などが行われます。メディアに関する質問などもあるかもしれません。面接でも40名から30名へ、4分の1が落とされます。

問いかけられた事をきちんと理解し、それにまっすぐ論理的に答える事が重要です。メディア関連の本を読むのも教養としては悪くは無いですが、即効性は無いと思います。メディアや情報やITに関して、社会の色々なできごとに問題意識を持ち、自分はどう考えるのか、それは何故か、日頃から友人と話したりすると良いです。先輩方のブログなども検索してみてください。

※ 現役研究生の私見です。受験にあたっては募集要項を良く読んでください。

(文責 角尾弘)

## クレジット

作成：情報学環教育部パンフレット製作チーム 2021

統括：中尾聖河 編集：篠原翼・小磯尚文（印刷用調整）

撮影：園田寛志郎 交渉連絡：前田春貴

記事：角尾弘 校閲：小竹朝子・小林千菜美・川口翔太郎

協力：武田伊真

発行：東京大学大学院情報学環教育部自治会

©2021 情報学環教育部自治会

大学  
院  
青  
反  
幸  
学  
王  
環